

編集後記

本号の特集として「頸椎の異常とリハビリテーション」をとりあげた。頸部痛を主訴とする患者はリハビリテーション医療ではあいかわらず多く、さらに最近では、後縦靱帯骨化症が厚生省の特定疾患に加えられるなど、あらためて「頸椎の異常」に焦点をしばってリハビリテーション上の問題点をうきばりにする必要があると思われる。そして、頸髄損傷とは別の観点から、この分野での第一人者の先生方に御執筆いただいた。

まず、津山氏は厚生省の特定疾患研究班の調査をもとに、後縦靱帯骨化症の実態について、ことにこの疾患がアジア諸国に多くみられるが、まだ、その病因が全く不明であること、しかし、治療法として頭蓋直達けん引や頸部コルセットの保存的方法が有効であることなどをしめされた。つぎに、石田氏は頸肩腕症候群というものと、他の疾患群との関連、また病因など明解に説明して下さり、ことに ADL の指導が治療上で重要なポイントであると指摘されておられる。

井澤氏他は小児の Down 症候群に上位頸椎の異常がみられることを報告され、これは以前、本誌に脳性小児麻痺児の頸椎異常に関する論文がとりあげられたことをおもいだすが、小児をあつかうリハビリテーション医療者はつねに心にとめておくべきことであろう。

平林氏は頸椎疾患に対する観血的治療法とリハビリテーションプログラムをあわせて述べられ、緒方氏他は頸部の運動療法は、ROM、筋力増強に加えて筋弛緩運動の重要性を強調されるなど、本特集によって頸椎疾患に対する up-to-date の知識が得られると確信する。

研究と報告では、上尾氏他によるリウマチ膝関節拘縮を硬膜外麻酔と運動療法により矯正する方法、また、首藤氏他、本田らは期せずして先天性切断肢のリハビリテーションの論文をよせ、木佐氏は小児の精神発達と筋緊張低下の関係を論ずるなど、いずれも興味あるものである。

リハビリテーション専門医制度も本決まりとなり、諸先生方の研究報告の投稿をさらに期待するしだいである。

脳卒中の講座は CT の第 2 部で、リハビリテーション医も CT 読影が必須となった現在まことに有益なものである。

最後になったが、大村氏が巻頭言で述べておられる高齢化社会とリハビリテーションは家庭や施設での老人ケアとあわせて、より積極的な老人のリハビリテーションの方向を示すものと考えられる。

今月も、読みごたえのある「総合リハ」をお送りできたと思い、編集者一同のよろこびとするところである。(千野 直一)

次号予告(第8巻第9号)

特集 痛みとリハビリテーション

痛覚の生理学……………京大・麻酔 新宮 興・他
痛みの測定……………東北大・神経生理 山本光璋・他
電気刺激による痛みのコントロール……………慶大・リハセンター 石田 暉
関節の痛みと筋力について……………自治医大・整形 井上 和彦
痛みと心身医学……………四国鉄道病院・整形 高口 真一郎

巻頭言 国際障害者年が始動……………国立身障者リハセンター 若松 栄一

研究と報告 手さげ袋マヒの 3 症例：手さげ袋のひもによる末梢神経麻痺……………慶大・リハセンター 小田典雄・他
車椅子座席にかかる圧力分布の測定：第 1 報脊髄損傷者における静的座圧パターン……………神奈川リハセンター 大橋 正洋

講座 脳卒中(9)脳卒中と CT スキャン(Ⅲ)くも膜下出血の CT……………東京女子医大・脳外 喜多村孝一・他
運動の発達(1)正常運動発達……………東大・リハセンター 上田 敏彰

一頁講座 リハビリテーションと法律(9)親権……………厚生省・企画課 北村 彰

ひと 東北大学医学部温研リハビリテーション医学部門初代教授 中村隆一氏……………宮城第一総合病院 杉山 尚

学会報告 第14回九州リハビリテーション医学懇話会……………産業医大・リハ部 緒方 甫

編集顧問

天 児 民 和
大 島 良 雄
小 池 文 英
杉 山 尚
砂 原 茂 一
津 山 直 一
水野 祥太郎

編集委員

明 石 謙
上 田 敏
大 井 淑雄
大 川 嗣雄
千 野 直一
土 屋 弘吉
横 山 巖

編集同人

赤 津 隆
今 田 拓
今 村 哲夫
江口 壽榮夫
萩 島 秀男
小 野 啓郎
加倉井 周一
河 邨 文一郎
五 味 重春
斉 藤 正也
沢 村 誠志
武 智 秀夫
永 井 昌夫
中 村 隆一
野 島 元雄
間 得 之
長谷川 恒雄
橋 倉 一裕
福 井 園彦
三 島 博信
渡 辺 英夫
飯 田 卯之吉
田 中 照子
小 川 孟
野 村 歆
小 島 蓉子
笹 沼 澄子
鈴 木 明子
高 田 玲子
林 玉 子
土 屋 和夫
松 村 秩

(細田, 山田)